

6. 座右の銘

継続は力なり
努力は嘘をつかない
練習は嘘をつかない

これらの言葉は、谷口史郎氏がスポーツをとおして、スポーツをやりつづけるなかで学んだことである。野球やソフトボールを現役でやれるのも、継続して努力、練習を積み重ね、体力を維持してきたからである。ソフトボールは週に3回のペースで練習をつづけており、今でも投げ方を研究し、どのように投げれば良いかを常時考えながら練習している。

禍福は^{あざな}糾える縄の如し

谷口氏の好きな故事がある。そのひとつが「禍福は糾える縄の如し」である。不幸が転じて幸福になったり、その逆に、幸福が転じて不幸になったりする。幸福と不幸は巡り巡って、代わる代わるやってくるものである。

人間万事塞翁が馬

もうひとつ好きな故事がある。「人間万事塞翁が馬」である。人生は、思いがけないことが幸福を招いたり不幸に繋がったり、誰にも予測はつかない。だから、やたらと喜んだり悲しんだりしても始まらない。

「塞翁」は、昔、中国の北辺の国境近くに住んでいた老人のことである。あるとき、その老人の馬が逃げてしまった。間もなくしてその馬が一頭の立派な馬を連れて戻ってきたので、人びとが祝福し

た。ところが、老人の子がその馬に乗って落ち、ケガをしてしまった。だが、ケガのおかげで兵役を逃れ、若者の多くが戦死する中で生き残れた。この故事から「塞翁が馬」と言う。

概して、谷口氏はこう考える。

戦争中に生まれ、戦後の貧しい時代から高度成長期、安定成長期をへて豊かになっていく日本を経験し、バブル経済崩壊後の1990年代からの長い経済不況期へと、谷口氏の人生にはその時々で必ずピンチもあればチャンスもあった。そのチャンスをいかに掴むか、波に乗るか、その瞬間の判断や選択で結果が決まる。人生一寸先は闇の場合もあるが、どんなときでも必ずチャンスは巡ってくる。一時一時を真面目に一生懸命に生きる人には必ず幸運は訪れる。

7. タオル業界、そして若者へ向けたメッセージ

「技術者あつてのタオルづくり」であり、当たり前前を当たり前前にやる、そんな業界を目指してほしい

日本のモノづくりの現場は、人材不足に悩んでいる。タオル業界も例外ではなく、とくに若い世代がいない。タオル製織に携わる谷口氏のメッセージは、若者に向ける前に、まずタオル業界に向けたものである。若者がタオル業界に関心を持ち、誇りを持って仕事ができる環境づくりを、業界挙げておこなわなければならない、という切実なメッセージである。

1 つに、技術者にもう少し着目してもらえる仕組みづくりが必要である。この意味で、2008年に当時の四国タオル工業組合が設置したタオルマイスター制度は人びとの耳目を集め、大きな意味があった。これをいかに継続していくかが今後の課題である。

2 つに、資格取得者に対する優遇措置を各社とも考えてもらいたい。たとえば、難関の国家技能検定1級を取得していても給料に反

映されるケースは稀であり、「さらに上を目指そう」というモチベーションを阻害しかねない。資格取得者に対する報酬制度が業界として確立していれば、若い世代へのアピールにもなる。

3つに、織機メーカーの口車に乗るな。「新しい織機（革新織機）はどんな製品でもボタンを押せばタオルが織れる。だから、技術者はいらぬ。」とんでもない話である。谷口氏いわく、「織機（革新織機）は織機メーカーがつくるが、その織機を扱いタオルをつくるのは技術者である。おなじ織機でおなじ柄のタオルを織っても、おなじタオルに織り上がるとは限らない。織機を調整する人が違えば、それぞれ人に個性があるように、織り上がるタオルにも個性がでる。良いタオルをつくるためにも、『思いやりのある厳しさ』を持って若い人へ忍耐強く技能・技術を伝え指導してもらいたい。」

言い換えれば、「技術者あつてのタオルづくり」であり、当たり前前のことを当たり前前にやる、そんな業界を目指してほしい。

4つに、技術者は、どうしても横の繋がりを築く機会に恵まれないため、技能士会をつうじて仲間をつくり、後継者たちに技能・技術や思想などについて伝授してほしい。人に教えることで、自らも成長する。自分のため、そして今治タオルの発展のために、ぜひ若い世代への指導をつづけてほしい。

段取り八分、仕事二分

つぎに、これからのタオル業界を担う若者世代に向けたメッセージである。

- 何事も一心になってとり組めば道は拓ける
- 世の中に必要なものは残り、不必要なものは減じる
- 正しく、真面目で、素直な心
- 段取り八分、仕事二分

最後の「段取り八分、仕事二分」は、準備や基本作業がしっかりできていれば、失敗やロスを未然に防ぎ、仕事の能率を上げること

ができる、という意味である。また、段取りという言葉には、おなじ仕事をする場合でも前回と違った方法を工夫し、一歩でも二歩でも生産性を高めようと努力する、という意味も込められている。進歩や発展は、この段取りの作業の中から生まれるのである。

8. お薦めの本など

谷口氏が毎日欠かさず読んでいるのは、「新聞」である。新聞は情報の宝庫であり、毎朝歯を磨くように新聞に目をとおすのは日課となっている。

タオル関連の記事を見つけると、ハサミで切り取ってファイリングする。丁寧にファイルリングされている資料を見ると、タオル業界に何が起こったのかを時系列に確認することができる。


タオル以外にも切りとられた記事がある。「天声人語」（朝日新聞）、「余録」（毎日新聞）、「春秋」（日本経済新聞）など大凡の新聞のトップページに、ベテラン記者が書くコラムがある。谷口氏が読んでいるのは、「編集手帳」（読売新聞）であるが、気に入ったコラムはハサミで切ってファイリングする。そのなかの一部を紹介しよう。

8年前にノーベル化学賞を受賞した白川英樹さん(72)が中学時代の思い出を語ったことがある。物理の時間、ひとりの生徒が「雲はなぜ落ちてこないのですか」と教師に尋ねた。「雲をつかむような質問だ」と教師は話をそらした。◆先生も分からないから一緒に考えてみよう。「そう答えてくれたら、私は化学ではなく物理の道に進んでいたかも知れない」と。学校の教室が好奇心の芽を摘み取る場になることもある◆夜道が教室になることもある。今年のノーベル物理学賞に選ばれた益川敏英さん(68)がストックホルムで受賞記念の講演をした。小学生の昔を回想している◆家具職人や砂糖商をしていた父親は化

学や技術にも関心が深く、いつも銭湯に通う道すがら、モーターの回る仕組みや日食、月食の原理を話してくれた。理科の面白さをそうして知ったと、“英語嫌い”の益川さんは日本語で話した。遠い日の父に語りかけた講演でもあったろう◆暗い路地を脳裏に描く。タオルと石鯨の手桶を小脇に、ときに手ぶりを交えて語る父がいる。耳をすまして聴く子がいる。並んで歩く二人の上には、夜空の黒板。

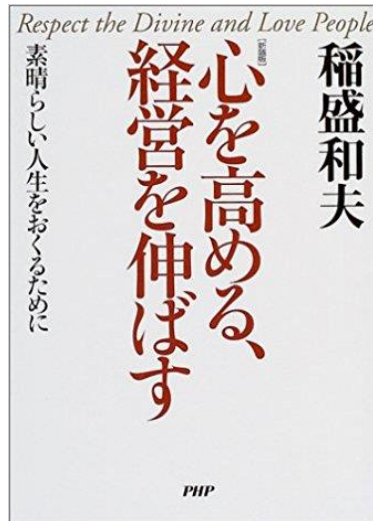
（「読売新聞」2008年12月10日の「編集手帳」より抜粋）

最後の段落に、「タオル」と書かれてある。コラムの内容も奥深いですが、谷口氏がこのコラムを保存している理由がそこにある。どんな記事を読んでも、タオルから目が離せない。

つぎに、『四国百山』（高知新聞社、1988年）は、50代の頃の愛読書である。子どもの大学進学を機に夫婦二人で休日過ごすようになり、気分転換と体力づくりのために天気のよい日曜日に二人で山登りをするようになった。登山口まで車で行き、そこからトコトコ歩いて頂上まで登り、自然の風景を背景に持参した弁当を食べる。これが定番のコースだが、なんとも贅沢で格別な時間だった。四国百山のうち30山は登った。西日本の最高峰である石鎚山にも何度も登った。登山家・ジョージ・マロリー  の「なぜ山にのぼるのか。そこに山があるからだ」という有名な言葉があるが、踏みしめる山の数が増えるにつれて、その気持ちがわかるようになった。

そして、オリム時代に会社の仲間と一緒に読んだ本が、稲盛和夫の『心を高める、経営を伸ばす』（PHP研究所、2004年）である。週に3回、各部署の従業員が集まって輪読し、意見や感想を述べ合った。同書を読んで思ったことがいくつもある。1つに、物事を成就させる源はその人が持つ情熱であること。成功させようとする意志、熱意、情熱が強ければ強いほど、成功する確立は高くなる。2つに、自分ひとりでは大した仕事はできないということ。上司、部

下、同僚など周囲にいる人たちと協力して進めていくのが仕事である。ただし、自分から積極的に仕事を求め、周囲の人たちが自然と協力してくれるような状態にしなければならない。これが渦の中心で仕事をするということである。自分が渦の中心にいて、周囲を巻き込んでいくような仕事の取り組み方をしなければ、仕事の喜びも醍醐味も知ることはできない。自らが渦を巻き起こせるような主体的で積極的な人材であるかどうかによって、仕事の成果、人生の成果も左右される。（完）



稲盛和夫『心を高める、経営を伸ばす』PHP研究所、2004年。

（今治市立図書館所蔵）

編集後記

「趣味は何ですか？」という不意の質問に対して、大概の人は「釣りです」とか「音楽鑑賞です」といった具合に、ひとつか二つ挙げるのがおそらく精一杯です。谷口さんの場合は違います。ソフトボール、ポーリング、ゲートボール、ウォーキング、ドライブ、滝見巡り。これでも足りないくらい多趣味であり、それぞれが筋金入りです。以前とり上げた宮田さんもそうでしたが、モノづくりが好きでよく働く人は趣味にあふれています。

谷口さんは、たくさんある趣味のなかでもソフトボールは突き抜けており、

結果も出しています。シニアの部門において全国大会で優勝するほどです。ポジションはピッチャー。中学時代から鍛えたその強靱な肩はいまも現役で、チームの優勝に貢献しています。こんなアクティブな谷口さんですが、物腰はたいへん穏やかで、インタビューの間、優しい笑みが絶えませんでした。

終始、和やかな雰囲気でのインタビューでしたが、インタビュー当日に用意された資料と写真の数々を拝見すると、谷口さんの勤勉さと誠実さと廉直さが伝わってきました。とくに、印象に残ったのは、谷口さんの履歴書です。白い紙に定規で入念に線が引かれ、それに沿って丁寧に文字が書かれていました。「谷口さんのような人が日本にはたくさんいて、日本のモノづくりが支えられてきたんだなあ。」なんともほっこりの気分にさせていただきました。（辻）

参考文献

- 「愛媛経済レポート」2004年6月7日、11頁。
- 「愛媛経済レポート」1999年9月6日、10頁。
- 「愛媛経済レポート」1998年1月5日・1月12日合併号、56頁。
- 「愛媛経済レポート」1995年1月16日、9頁。
- 「愛媛新聞」2007年4月19日、7頁。
- 「海南タイムズ」2004年4月12日（Vol.39）、9頁。
- 「海南タイムズ」2003年11月3日（Vol.17）、10頁。
- （株）オリム提供資料「自社開発商品」。
- 「繊維ニュース」2004年3月4日。
- 「繊維ニュース」2003年7月23日。
- 「調書」2013年11月1日（谷口史郎氏提出資料）
- 「日本経済新聞社（四国版）」2005年3月24日、33頁。

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の21人目は、（有）木下ソーイング会長の木下正男氏をと

り上げる。タオル製造においても欠かせない縫製は、地味な作業でありながら重要な仕上工程である。縫製一筋の木下氏に時代の変化とともに縫製業界、そして会社がどのように変貌を遂げてきたのかについて話をうかがう。

